

能であった。肝障害型胆管炎、腎障害型胆管炎、及び胆汁性胆管炎についても言及した。

9. 反復性肝内胆汁うっ滞の2症例

川村 正・石川 忍 (長岡赤十字病院)
遠藤 次彦・佐藤 俊郎 (内科)
加藤 俊幸・小越 和栄 (県立ガンセンター
新潟病院内科)

妊娠性反復性肝内胆汁うっ滞 (RICP) および良性反復性 (家族性) 肝内胆汁うっ滞 (BRIC) の各1症例について報告した。RICP の症例は、34才、主婦。過去3回の妊娠中、いずれも妊娠7ヶ月より皮膚掻痒感と黄疸が出現し、分娩約1週後まで持続した。肝機能検査成績および生検肝組織上、純うっ滞型を呈した。

BRIC の症例は、50才、主婦。19才以来、10度、皮膚掻痒感と黄疸が出没した。過去8回の生検肝組織は、いずれも純うっ滞型を呈し進行性の所見はなかった。

RICP および BRIC は、稀な疾患であるばかりでなく、胆汁うっ滞成立の機序を解明する上でも重要である。今後、胆汁酸代謝および電顕的側面から検討を加える予定である。

10. 肝硬変における病因別臨床像の差に関する検討

笹川 哲哉・渡辺 雅史 (新潟大学第三内科)
銅治 康之・市田 文弘

肝硬変症例を、その病因により HBs 抗原陽性の肝硬変とアルコール性肝硬変において、入院時の身体所見、検査成績の比較検討を行なった。

その結果、入院時の身体所見から、臨床的に非代償期と思われる症例はアルコール群に多い傾向を認め、HB群では精査入院例が多いのに対し、アルコール群では治療入院例が多いものと考えられた。また、アルコール群で肝腫大の程度が強く、クモ状血管腫の出現頻度が高かった。

一方、肝機能検査成績の比較では、アルコール群で、GOT/GPT 比、T. Bil, D. Bil, ALP, γ -GTP, LAP 等が高く、T.C. が低値を示した。

その他の検査所見では、アルコール群で、IgA, 血清銅, 尿酸, フィブリノーゲンが高値を示す傾向がみられ、検血所見ではアルコール群の多くに大球性正色性貧血を認めた。

11. 門脈圧亢進症における門脈血行動態の検討

大野 隆史・畠山 重秋
塚田 芳久・尾崎 俊彦 (新潟大学第3内科)
市田 文弘

肝硬変 (LC) 18例、原発性胆汁性肝硬変 (PBC) 5例、特発性門脈圧亢進症 (IPH) 2例、アルコール性肝障害 (ALD) 1例、他1例の計27例に経皮経肝門脈造影を施行し各種 shunt と門脈圧亢進との関連について検討した。shunt を Gastro-esophageal (Type 1), Gastro, Spleno-Renal (Type 2), Paraumbilical (Type 3), Others (Type 4) と分類した結果、Type 1; 81.5%, Type 2; 18.5%, Type 3; 29.6%, Type 4; 7.4% の出現頻度であった。疾患別では PBC で Type 1 が、IPH で Type 4 の出現が有意に多く認められた。門脈圧と門脈径には相関は見られなかったが shunt 総断面積が大きくなるにつれて門脈圧が低くなる傾向を認めた。また Type 2 を形成する群は他の群に比べ有意に門脈圧が低かった。脳症を程するものの半数は Type 2, 3, 4 の shunt を形成し血中アンモニアも高値を示し、残りの半数は Type 1 であったがフィシャー比が有意に低値を示した。また大循環系へ大きな shunt を形成する症例には高率に胃静脈瘤を認めた。

12. 粘液産生肝嚢胞腺癌の一例

秋山 修宏 (信楽園病院内科)
清水 武昭・長谷川 滋 (同 外科)

症例は62歳の女性で、発熱を主訴として入院した。入院時検査で ALP と CA 19-9 の著明な上昇を認めた。腹部エコー、腹部 CT で肝嚢胞腺癌を疑う所見が見られた為、PTCD を行った所、肝嚢胞より粘液が採取され、細胞診で Class IV であった。血管造影でも肝嚢胞腺癌を思わせる所見が得られた。以上より肝嚢胞腺癌と診断し手術となったが、切除不能であった。リンパ腺の組織診断より粘液産生腺癌と確認できた。嚢胞と胆管の交通はなかった。剖検は行なわなかった。肝嚢胞腺癌は稀な疾患で、今までに約40例が報告されているにすぎない。画像診断は重要となるが、肝嚢胞腺腫との鑑別は困難である。癌の発生については明らかではないが、肝先天性嚢胞及び嚢胞腺腫から発生するという説が有力である。